

## 京都・平安京跡左京四条一坊一町

所在地 京都市中京区壬生朱雀町

調査期間 一九九二年（平四）一一月～一九九三年四月

発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

調査担当者 鈴木久男・清藤玲子・南孝雄

遺跡の種類 都城跡

遺跡の年代 平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平安京左京四条一坊一町に位置し、西は朱雀大路に面する。調査は、小学校の校舎建て替え工事に先立ち行なわれ、工事

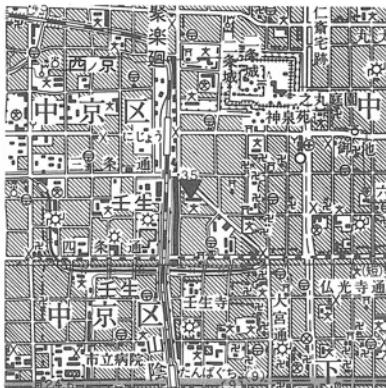
計画に従い四つの調査区を設定した。

確認された遺構は、大きく平安時代の前期と後期に分かれるが、木簡が出土したのは第二、第三トレーナーで検出した平安時代前期、九世紀代の遺構からである。

(1) 沙賀我太雲朗具不祢乃都〔久カ〕

・ □母□難□□□ □ □

(128)×15×7



(京都北西部)

九世紀の遺構は更に二期に  
九世紀の遺構は更に二期に  
九世紀の遺構は更に二期に

分かれる。第一期は九世紀の前半、平安京造営に伴う時期で、一町の南側では六角小路の南北両側溝が検出された。しかし町内の中央には、北東から南西に流れる幅4mの自然流路も存在する。第二期も九世紀の前半であるが、町内の自然流路は埋め立てられ、一町の南西部に園地の池が造られる。池の規模は東西幅三八m、南北幅は不明、深さ〇・四mを測る。池の汀には〇・二m大的石を敷いた州浜を施している。汀の北西部には導水施設も存在する。この園池は九世紀の後半には廃絶する。

遺物は、自然流路、池からそれぞれ出土する。自然流路からは土器類の他、木器も大量に出土する。木器には、漆塗りの刷毛・下駄・ヘラ状木製品（籌木？）等がある。池からも土器類・木器などが出るが、土器の中には須恵器の壺の体部に「家」と記された墨書き土器がある。

8 木簡の釈文・内容

木簡は六点出土している。(1)から(3)が自然流路、(4)から(6)が園地の池からの出土である。

- (2) 「返抄 納籠カ 荒□□ □□」  
十四年十月十□日□□ 247×32×3 011
- (3) 「□□□□□……□□□斗□□□」  
×月廿六日史生□□人麻×
- (4) 「朱雀院炭日記」  
□十一年五月十三日始】
- (5) 「朱雀院炭日記」  
□十一年五月十三日始】
- (6) 「□□」
- (90) × (22) × 2 051  
(29) × 17 × 3 039
- (4) 表
- (1) の形状は○一型式に似るが、下方を二又に削り、人形に似た形となつてゐる。裏面二字目は示偏、七字目はしんにようの文字である。(5)は、やや大型の題籤で、軸部は欠損する。二行目の第一字は不明であるが、共伴する土器から「十一年」は承和二年(八四

四)、貞觀二年(八六九)が考えられる。「炭日記」がどのような文書であったのか現在知り得ないが、朱雀院は、今回の調査地とは、朱雀大路を挟んで西側に存在した累代の後院であり、当地に朱雀院との関係の深い施設が存在したことを示唆している。

木簡の釈文については、奈良国立文化財研究所の綾村宏、館野和己、渡辺晃宏氏のご教示を得た。

## 9 関係文献

〔財〕京都市埋蔵文化財研究所『平成四年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(一九九五年)

(南 孝雄)

